

国語科文学教材研究批評の確立をめざして 2

一『実践国語研究別冊 「走れメロス」の教材研究と全授業記録』を素材として一

佐々木 秀穂

(広島大学附属中高等学校)

1 本稿の目的

文学の授業の批評を行おうとする場合、教材解釈の問題は避けて通れない。文学の授業においては授業者の教材解釈のあり方がその授業の性格に大きく作用しているからだ。授業批評においては、もちろん批評する授業の授業者の読みを重視しなければならない。かといって、授業者の教材の読みをたどるだけでは、授業の批評も授業構成や指導技術の巧拙の判定のみに終わるおそれがある。批評者は教材に対して、自分の読みを持たなければならない。しかし、授業者の読みを無視して批評者の読みを行うだけでは、ただの文学の読みか単独の教材研究になってしまう。授業批評をめざす教材研究批評は、授業者の読みをくぐって、批評者の読みを作り上げていかなければならない。

本稿は、中学校2年生の教材として広く扱われている太宰治の「走れメロス」を題材として、授業者の読みをくぐりつつ批評としての読みを確立していく、教材の批評者としての読み方を模索する。

2 批評対象

今回、批評の対象とするのは、次の実践記録である。

全国国語教育実践研究会編『実践国語研究別冊 No.112 「走れメロス」の教材研究と全授業記録』(1991 明治図書)

これは、「実践国語教育」誌の別冊として、教材研究と授業記録とを1冊1教材にまとめたものである。

冒頭に甲斐睦朗氏による教材研究『「走れメロス」の読み方』が掲載され、ついで、二つの実践が報告されている。巻末には、石黒由香里氏による『「走れメロス」の研究・実践文献解題』が収められる。

110～111頁にある藤田元則氏の「あとがき」にあたる文章から、この実践・研究は、大分実践国語研究会のメンバーのうち、中学校の教員10名、小学校教員2名、大分県竹田教育事務所長1名、計13名からなるチームによって約3年間かけて進められたことがわかる。また、はじめ、このプロジェクトの中心的存在だった有定稔雄氏が途中、急病のために逝去されるという事態の中で進められたことも明らかにされる。その記録の中に、次の一節がある。

「走れメロス」全授業記録と題しても、何ら新しく打ち出せるものはないかもしれない。講演していただいた甲斐睦朗先生の「語彙・語句に着目した読みの指導」もこなしきれて

いない。また、生前、有定先生が提唱された「客観的読み」についても、意を体することはできなかった。いや、むしろ、もっと別の読み方を志向してきたのかもしれない。

しかし、この記録作業の過程において、数十回もの会を重ね、「メロス」に三年間、取り組んできた。「メロス」を足場に、大分実国は、団結を強めた。指導陣のいないサークル活動ではあったが、若い力が羽ばたこうとしている。一つの実践の視点、研究の視点を得ようとしている。拙い授業記録ではあるが「信実」(佐々木注・「走れメロス」の中のことばである)追求の熱意をおくみ取りいただきたい。(111頁)

この実践においては、冒頭の甲斐氏の教材研究がそのまま授業に直結しているのではなく、その影響を受けつつも、授業者自らの読みと考え方により、授業がなされたと考えられる。また、この著作には、教師集団の長期にわたる研鑽の息吹が感じられる。こうした共同性は、授業改善を推進していく際には不可欠なものであり、教員一人一人を勇気づけてくれるものでもある。こうした姿勢は、もっと評価されるべきである。

授業記録は2本収められている。

第I部

学習の手引きを生かした比べ読みの指導(平成元年11月)

大分大学教育学部附属中学校 松崎英敏

第II部

「走る」「止まる」表現に着目して主題に迫る読みの指導(平成3年2月)

大分市立東中学校 久保田和子

第II部の実践の方が新しく、表現に着目する点など、甲斐氏の提案を受けた授業となっているが、第I部の方が全授業を記録しているのに加えて、教師自身の教材解釈がはっきり出ている。そこで今回は第I部を批評の対象とする。

3 教材研究批評の実際

(1) 指導目標・指導計画概観

では、指導目標・指導計画から、授業者の授業に向かう姿勢、教材の扱いに対する考え方について見ていこう。

松崎氏が授業前に、どのくらいの生徒が「走れメロス」を読んだことがあるかを調査したところ、クラス45名中38人までが読んだことがあり、しかもその内容をよく覚えていたという。即ち、今回の「走れメロス」の授業は、多くの生徒にとって再読となることをふまえての授業である。松崎氏は、「一 教材について」の項の中で次のように述べている。

そこで、このような生徒たちに、どのように読ませたら、今まで味わったことのない文学的な読みを体験させることができることになるか、それが授業構想の基底となる。

今回の授業では、作者自ら断っている「古伝説とシルレルの詩から」に注目した。生徒はまだシラーの詩「人質」は読んだことはない。この詩と比べ読みをさせたらどうなるか。これが授業構想の出発点である。(42頁)

ここで述べられているのは授業についての着想である。松崎氏が「走れメロス」を読んだこと

のある生徒に対する授業として考えたのは、「今まで味わったことのない文学的な読みを体験させる」ということであった。そのための方法の着想が、シラーの詩「人質」との比べ読みである。

ここで我々が考えなければならないのは、松崎氏がいう「文学的な読み」とはどのようなものであり、そのための方法がなぜ比べ読みなのか、ということである。

直接、松崎氏がその説明をしているのは以下の部分である。

このように、シラーの「人質」と「走れメロス」とを比べ読むことによって、「走れメロス」の主題や構想に関わる学習課題をつかませることができるのではないかと考えた。そして、その学習課題として、「もっと恐ろしく大きいものとは何か」が生まれてくると考えた。この内実を追求することは、ドラマとして眺めていた読みから、メロスと共に苦しみ、涙を流し、成長していく文学の読みへと高まるものとする。(43頁)

文学的な読みとは、「メロスと共に苦しみ、涙を流し、成長していく」ような読み方であり、比べ読みは、「走れメロス」の主題や構想に関わる学習課題、「もっと恐ろしく大きいものとは何か」を導くために用いられる手法なのである。つまり、「生徒はまだシラーの詩「人質」は読んだことはない。この詩と比べ読みをさせたらどうなるか」という方法に関するモチーフに対する松崎氏自身の答えは、比べ読みにより、学習課題が明らかになる、というものだった。

では、比べ読みによってなぜ、「もっと恐ろしく大きいものとは何か」という学習課題が導かれるのだろうか。松崎氏は原詩と「走れメロス」との違いのうち、2箇所注目する。ひとつは、疲労困憊して倒れたメロスの心理描写の部分、もうひとつは、最後に走るのを止めようとするフィロストラトスの人物設定である。

メロスの心の中に、友に対する裏切りの気持ちを忍び込ませたことで、刑場での「わたしを殴れ。力いっぱいほおを殴れ。……」という感動的な場面が生み出されることになる。裏切ったことがないのなら、意気揚々とやって来て「笑ってはりつけ台に上ってや」ればよいのだから。また、裏切りの気持ちを持ったということが「わたしは、なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。」というメロスのことばの内実を支えることにもなるという。

この「もっと恐ろしく大きいもの」というメロスの言葉は、フィロストラトスとの会話の中で出てきたものである。松崎氏は、直前のフィロストラトスの台詞がこのメロスのことばを引き出したとしている。さらに、ひとつめのメロスの裏切りの心と、フィロストラトスの人物設定の原詩との違いをからめて、次のように作品を解釈する。

なお、ここで注目すべきは、原詩では、メロスの忠実な家僕となっているフィロストラトスを、セリヌンティウスの弟子に変えていることである。なぜ、そうしたのか。

これらはすべて、「メロスの裏切り」とかかわっている。「裏切り」があつてこそ、セリヌンティウスの弟子であるフィロストラトスの「ああ、あなたは遅かった。お恨み申します。」という言葉が、不実な自己を自覚させるものとして迫ってくる。身内の言葉では、力はない。さらに、この「不実な自己の自覚」があつてこそ、「もっと恐ろしく大きいもの」が見えてくるのである。「間に合う、間に合わぬ」・「人の命」を超えた、「もっと恐ろしく大きいもの」は、言葉に表すことのできない、「見えてくるもの」である。メロスは、フィロストラトスの言葉のなかに、崇高なセリヌンティウスの精神を見た。刑場に

引き出されても、深い信頼に基づく信念で、ゆらぎもしない友の姿に、十字架の神の姿を見たにちがいない。それは、「不実な自己の自覚」なしには見えないものである。自らは至りえないが故に崇高なのである。この崇高さにうたれたメロスには、今までに感じたことのない気高い力がわいてくる。それは、「ただ、わけのねわからぬ大きな力に引きずられ」るようであった。(43頁)

この考察のポイントは「不実の自己の自覚」である。原詩にはない「裏切りの気持ち」が「不実な自己」をメロスの中に生じせしめ、また原詩では自分の家僕であるフィロストラトスをセリヌンティウスの弟子とすることで、遅れを責める「恨み」という言葉に力を持たせ、不実な自己を「自覚」させたとする。この自覚を得て、セリヌンティウスに崇高なものが感じられ、はじめて「もっと恐ろしく大きいもの」が見えてくる、というのが松崎氏の読みである。

松崎氏はこのような読みをふまえて、指導目標を次のように設定している。

指導目標

- シラーの「人質」と「走れメロス」とを比べ読むことによって、「走れメロス」の主題や構想に関わる学習課題をつかませる。
- 「もっと恐ろしく大きいものとは何か」を意味探究の視点とすることによって、ドラマとして眺めていた読みから、メロスと共に苦しみ、涙を流し、成長していく文学の読みへと高める。(44頁)

この指導目標にも松崎氏の教材の読み方が十分に反映されていることがわかる。このように指導目標は教材の研究に先行するものではなく、教師の教材の読みや、授業の方法などから逆に導かれる場合もあることがわかる。

それでは松崎氏の教材の読みに沿いながら、授業批評者としての教材研究を試みてみよう。

(2) 作品解釈の中心

作品のポイントを、メロスの「不実の自己の自覚」におく松崎氏の読みは、走れメロスを単なる友情物語や道徳よみものから、文学の読みへと変えていくために、かなり有力な説だといってよいように思う。この、松崎氏の読みでいくと、松崎氏自身が予定している比べ読みによって導かれる学習課題、「もっと恐ろしく大きいものとは何か」に対して、ただ、「信実」とか、「友情」とか答えるだけでは、意味をなさなくなってしまうからだ。

松崎氏の読みでは、走っているメロスにとって、「もっと恐ろしく大きいもの」は、フィロストラトスの話の中の、友、セリヌンティウスの姿にあった。それは裏切りという精神的事実を経過してしまった自分にとって、つまり汚れた自分にとっては、汚れなき崇高な人間の精神の姿である。そう感じたからこそ、刑場でセリヌンティウスに殴られてからでないメロスはとても彼と抱擁できなかったのである。実際には、セリヌンティウスもまた、ちらとメロスを疑ったことはあった。従ってメロスの感じたこの崇高なもの、「もっと恐ろしく大きいもの」は、完璧な形で実在していたのではない。しかし、実在はしなくとも、二人はその存在を強く感じる事ができた。セリヌンティウスとて、ほとんど全裸で血を吐いたあともなまなましく、ぼろぼろで刑場にたどりついたメロスの姿に、メロスが彼に感じたのと同じものをみただであろう。彼らは「信実」とか「正義」とか「愛」が、自分の中にあるものとしてではなく、言い換えれば、自分の存在がそれらを備え持った勇者や賢者なのではなく、逆に「信実」とか「正義」「愛」とは、自分

にはわけのわからないもので、自分はただ、それらに引きずられて生きている（走っている、待っている）に過ぎないのだということを知ったのだ。

つまり、松崎氏の「不実の自己の自覚」の読みの中心点は、「もっと恐ろしく大きいもの」とは何かを概念的に理解することではなく、その「もっと恐ろしく大きいもの」を、「信実」といっても、何と言っても、それが、メロスには「至りえないもの」、メロスの持っていないものとして把握する、ということの方にある。そうすることにより、メロスは、登場時の自分に絶対の自信のある奢り高ぶった人物から、物語の最後には、純粋なもの、よきものに憧れ、求めていく人物へと変換されていくのである。はじめから高みにいる人物が、未熟でねじ曲った人物をやっつける、または論ずという物語ではなく、はじめは自信も力もないか弱い人物が、苦難を乗り越えながら強くたくましく成長していく物語でもなく、自分の思惑の中でのみ信実が「ある」とか「ない」とか言っていた人物が、行動し、自分の本当の弱さにぶちあたっていくなかで、人を信じることや約束を守ること、誠実であることなどの本当の困難さ、崇高さに触れていく、そういう物語として読んでいけるのである。

松崎氏は、この読みによって「走れメロス」の教材の扱いを主題の追求という点から脱中心化してしまっている。指導目標にみた通り、松崎氏自身は比べ読みを、主題や構想に関わる学習課題、即ち「もっと恐ろしく大きいものとは何か」に至る読みの方略として用いている。しかしながら、見てきたとおり、この比べ読みが松崎氏にもたらした教材解釈は、「もっと恐ろしく大きいものとは何か」という問いに答える（「信実」など）ことにはとどまらない方向に進んでおり、むしろ「それがどのように作品中に現れたか」という方向に向かっている。つまり、何がテーマか、ではなく、テーマをどのように描いたか、という方向に読みを向かわせるものである。指導目標のふたつめ、「○「もっと恐ろしく大きいものとは何か」を意味探究の視点とすることによって、ドラマとして眺めていた読みから、メロスと共に苦しみ、涙を流し、成長していく文学の読みへと高める。」に見える「意味探究の視点とすることによって」とは、この問いに答えることが目標ではないことを示し、「メロスと共に苦しみ、涙を流し、成長していく文学の読みへと高める。」とは、その過程、テーマの「あらわれ」を問題として、教室での読みも、読みの成果よりもその過程の方に意義をみいだそうとするものである。

しかし、松崎氏がこの転換をどこまで意図的に行ったかは多少疑問も残る。先の引用にもあげた箇所だが、「そして、その学習課題として、「もっと恐ろしく大きいものとは何か」が生まれてくると考えた。この内実を追求することは、ドラマとして眺めていた読みから、メロスと共に苦しみ、涙を流し、成長していく文学の読みへと高まるものと考え。」として、氏は「もっと恐ろしく大きいもの」の内実を追求することを授業の中心に据えようとしているからだ。実際の授業においても、この問題の追求に2時間を費やすことになる。この内実の追求がいかに行われるかに、松崎氏の授業の成否がかかるといってもよい。

(3) 王の改心のなぞ

「走れメロス」の教材研究において、重要であるにも関わらずあまり重視されてこなかった問題に王ディオニスの改心の問題がある。

「走れメロス」は表面上、王とメロスの闘いである。人を信じられぬといていた王が、最後に顔をあからめて「おまえらはわしの心に勝ったのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。」と言う。構図的に見れば単純明快であり、メロスとセリヌンティウスが信実が実在するこ

とを証明してみせたため、王も悪い夢から醒め、人を信じるようになった、ということになる。しかし、例えば、「走れメロス」に対して、「つまらない」と反応する中学生のなかには、メロスの大げさな自己表現だけではなく、この最後の王の改心に納得がいけないという生徒も多いのである。

顔面は蒼白で、眉間のしわは刻み込まれたように深い。そして、人を信じられぬと言い、妹婿や、自分の息子(世継ぎ)や、妹や、妹の子、自分の妻、そして、腹心の臣下と、次々に殺していった王が、そう簡単に、あっけなく改心するはずがない、というのである。

「走れメロス」の読みについては、昭和40年に荒木繁氏によって「日本文学」誌上で「走れメロス」をリアリズム小説として読ませてはいけないという指摘がすでになされ、最近、須貝千里氏も、同様の指摘をしている。(『対話をひらく文学教育——境界認識の成立』 1989 有精堂)

須貝氏は生徒の一読後の感想を3つのパターンに分類し、それぞれ

- a 「走れメロス」を相と信実の物語、自己変革の物語として読み、素直に感動を表現するタイプ。
- b メロスのような人物はこの世に存在しない、非現実的でばかばかしい物語だと考えるタイプ。
- c メロスはすばらしい。しかしそんな人はこの世にはいないとする、a、bの読み方の折衷タイプ。(前掲書189頁)

としたあとで、次のように述べている。

bタイプの読みが、実はもっとも作品の構造にふれた読みなのである。戯画化されたく単純>と<複雑>の対決、対比の物語としての「走れメロス」と、それはもっとも近い読みだったのである。しかし、「走れメロス」の教材論は、そうした方向ではなされてこなかった。

「走れメロス」はリアリズム小説ではなく、寓話である。従来の授業は、この寓話性を見過して、実在の人間と等身大の人物が活動するリアリズム小説として読みすぎていた。だから、心理がまず問題とされたのである。しかし、それ以前に、登場人物がある人間の<型>を表していることがとらえられるべきだったのではないか。(前掲書188頁)

寓話として、それにふさわしいルールで読むことを須貝氏は求める。たとえばイソップの話に、「狐は口をきかないし、あの葡萄はすっぱいなどと言いつくすはずもない。」とか、「蟻は狩人に恩返しをしたりはしない」とかみついたところでしょうがない。同様に、「走れメロス」に対しても、「走れメロス」と言う寓話で何が語られているか、に焦点をあてて読むべきだ、としているのである。「走れメロス」をリアリズム小説として読むのは、確かに不自然なところがある。しかし、須貝氏のあげたbの「メロスのような人物はこの世に存在しない」というのは、これが設定が古代であること、歴史上でこのようなエピソードは多々あることなどを考えれば、生徒の実感としては尊重すべきであるが、この筋書き自体を非現実的であるとは断言できないだろう。細かく読んでいけば、結婚式も間近で、その準備の買い物に街まで来たはずなのに、村に帰って花婿に式を早めたいといったら、こっちは何の支度もできない、せめて葡萄の季節まで(物語の季節は初夏である)待ってくれと言われるなど、リアリズムというには変なところも多い。しかし、王城にこのこ出かけていくことも、橋が落ちたり、山賊が出たり、疲れて倒れたとこ

ろのそばにたまたま泉があつて助かったり、という偶然の重なりは、できすぎではあるが、あり得ないことではない。まして、生徒がもっとも嫌う(または疑う)メロスとフィロストラトスの友情のあり方も、もっと数奇な事例はいくらでもあげることができるであろう。

この小説を非現実的と感じさせているのは、実は話者の語り口なのである。いきなり「メロスは激怒した」で始まる、講談調の大きき語り口、漢語と口語体を織り混ぜた太宰独特の文体が、小説に劇的効果を与え、同時にリアリズムを削いでいる。もちろん、須貝氏の指摘した、人物が典型的であるという点は重要である。しかし「走れメロス」を完全に寓話として割り切って読むなら、メロスの人物像も、王も、その役割としてのみ読まれることになり、先程あげた松崎氏のようなメロスの内面変化の読みはできなくなってしまう。「走れメロス」を等身大の人物が動く近代的リアリズムの世界として読むことには無理はあるが、だからといって完全に寓話としてしまうのは、太宰の作り出した小説世界を狭めることになる。中島敦が「山月記」で中国の古典「人虎伝」からモチーフを得、人間が虎に変身する話を書いたからといって、「山月記」を寓話だと割り切ることはできない。「山月記」が近代的自我の苦しみを書いたのに対して、「走れメロス」は古典の英雄の活躍と倫理観をそのまま写したからだ、とするような読みの姿勢が、「走れメロス」寓話論の根底にはある。たしかに、リアリズム小説を読むように須貝氏のあげたaの読みを推進していく授業が多かったのは問題がある。だが、裏を返してこの小説が寓話だといったところで、「寓意を読む」授業では、また作者の意図と称してaのような寓意を見だし、説教くさく終わってしまうのが関の山である。大切なのは、講談調だとしても典型的だとしても、物語中の人物が「生きて動いているか」、という点であり、典型的な人物なら人物として行動や心理に説得力があるか、ということだ。これが、文学として「走れメロス」を批評していく際の重要な視点になるのである。

このとき、王の改心が、「なぜ」として浮上してくるのである。

(4) 信実とは何か

先程述べたように、人を信じられぬ故に、妹婿や、自分の息子(世継ぎ)や、妹や、妹の子、自分の妻、そして、腹心の臣下と、次々に殺していった王が、そう簡単に、あっけなく改心するのはどうしても違和感がある。だが、太宰は、最後の刑場のシーンで、その不自然さをほとんど隠してしまうほどに、場をひとつのムードに包み込んでいる。このシーンで王が「では、約束通りメロスを処刑せよ」と刑吏に告げることは、現実では十分あり得ることなのにほとんど考えられないほど、太宰はこのシーンの描き込みに成功している。作品の流れに乗ってしまえば、その場にいた街の人々にとっても、読者にとっても、この王の改心は納得がいくものなのである。

なぜだろうか。先に挙げた松崎氏の教材解釈は、この問題に対して、ひとつの解答の可能性を示唆している。松崎氏の解釈をふまえながら、もう少しこの問題を考えてみよう。

松崎氏の解釈はこうであった。原詩にはない「裏切りの気持ち」が「不実な自己」をメロスの中に生じせしめ、また原詩では自分の家僕であるフィロストラトスをセリヌンティウスの弟子とすることで、遅れを責める「恨み」という言葉に力を持たせ、不実な自己を「自覚」させたとする。この自覚を得て、セリヌンティウスに崇高なものが感じられ、はじめて「もっと恐ろしく大きいもの」が見えてくる、というものである。そして松崎氏のこの解釈のポイントは、「信実」なり、何なり、「もっと恐ろしく大きいもの」が、メロスやセリヌンティウスの中に実在するのではなく、常に自分には到達できないものとしてありメロスが見るものとしてある、という点で

あった。

松崎氏のように「走れメロス」の構造をとらえたとき、王の最後の台詞も、単に寓話の類型的反応の枠を越えて解釈することが可能になる。

「おまえらの望みはかなったぞ。おまえらは、わしの心に勝ったのだ。信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。どうか、わしも仲間に入れてくれまいか。どうかわしの願いを聞き入れて、おまえらの仲間の一人にしてほしい。」

この王の台詞は、メロスが約束の刻限までに帰ってきたという「事実」にもとづいて言ったものではないのだ。また、信実がそこに「ある」ことを、みたものでもない。ここでは、信実はそれを信じる故に人を衝き動かすもの、それを求める故に人を走らせ、または待たせるものとしてある。また、メロスやセリヌンティウスを信実を体現している人間として見たのもない。信実にあこがれ、信実に引きずられて生きるちっぽけな人間として、王は二人を見たのである。だから、メロスとセリヌンティウスは王の心に勝ったのではあるが、王が負けたのはメロスとセリヌンティウスではない。王が仲間にしてほしいといっているのは、そうした「信実」をおそれ、引きずられて生きるしかない人間の、別の言い方で言えば、自分の中に裏切りの気持ちを抱きながらも、それでも人を信じ、その信頼に報いようとする人間の仲間に入れてほしいといっているのであって、信実の心を持ち、人を信じられる強い心を持つ理想的人間の仲間にしてくれといっているのではないのである。

この違いは小さいようで大きいのだ。王の前に「信実」が実物として提示されたのではないからだ。逆にメロスとセリヌンティウスとて、王と同じように人を疑い、友を裏切ったということが二人の会話で明らかになっている。つまり、ここは、裏切りを自らの内面に持つメロスとセリヌンティウス同様、寓話的な構造から逸脱しているところなのである。

だとすれば、王は、「見よ、今互いを信じて待ちつづけ、約束を守って帰ってきた二人とて、わしと同じ心を持っておった。純粋な信実などというものは存在しないのだ。今日のところはおまえらの努力に免じて許してやる。しかし、今後は、人の心を疑うのは、もっとも恥ずべき悪徳だ、などと、知ったような口を利かないことだ。」と負け惜しみを言いつつ、メロスを放免することで群衆の気持ちを押さえ、王城に引き返すこともできたはずである。むしろ、もう引き返せないほど、肉親を始め多くの人を殺してきてしまった暴君ディオニスとすれば、同じ敗北・退場でもこちらの方が似つかわしい。だが、ディオニスは改心してしまい、先の台詞を言うことになる。そして、読者は気をつけないと、その展開に違和感さえ覚えぬ。

王の最後の台詞は、原詩となったシラーの「人質」の中の王の台詞と、そっくり同じである。従って太宰は、ただ原詩のまま、王に言わせたのだととることができる。だが、松崎氏も指摘しているように太宰は原詩にない部分を付け加えたり、設定を変えたりしてかなり加工しつつ「走れメロス」をつくっており、その語り口からも、また心情吐露をふんだんに使った構成からも、太宰は太宰のモチーフで「走れメロス」を貫いていたと考えてよい。したがって原詩の王の台詞がそのまま使われているとすれば、太宰のモチーフにとってもこの台詞はぴったりだったのだと考えねばならない。

さて、王の改心の内容はどのようなものだろうか。台詞の中で王が思い知ったことと言えば、「信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。」ということである。この信実という言葉は、多く

の実践で主題として定位され、また、「もっと恐ろしく大きなもの」の中身として答えられたりしてきた。作品中にこの信実ということばは4回登場する。が、この最後の信実に比べると、その前に出てくる3つはどれも軽いのである。

・ 1回目

今日はぜひとも、あの王に、人の信実の存するところを見せてやろう。そうして笑ってはりつけ台に上ってやる。メロスはゆうゆうと身じたくを始めた。(出発前に村で)

・ 2回目

今だって、君はわたしを無心に待っているだろう。ああ、待っているだろう。ありがと、セリヌンティウス。よくもわたしを信じてくれた。それを思えば、たまらない。友と友との間の信実は、この世でいちばん誇るべき宝なのだからな。(疲労困憊して倒れたまま)

・ 3回目

ああ、もういっそ、悪徳者として生き延びてやろうか。村にはわたしの家がある。羊もいる。妹夫婦は、まさかわたしを村から追い出すようなことはしないだろう。正義だの、信実だの、愛だの、考えてみれば、くだらない。人を殺して自分が生きる。それが人間世界の定法ではなかったか。(2回目と同じシチュエーションで)

1回目、2回目、3回目とも、メロスの心中の言である。メロスの心に思い上がりや、紋切り型の思考が見える。4回目の「信実」を前の3回と同じようにとるなら、この王の豹変はお笑いでしかない。だが、松崎氏のいうように、メロスが「不実の自己の自覚」を経てたどりついたのならば、王がみたメロスとセリヌンティウスの信実とは、1回目のようなお気軽なものではあり得ない。

また、王の台詞の「おまえらの望みはかなったぞ。」とは、何だろうか。そして、「おまえら」とは、誰だろうか。まずは素直にメロスとフィロストラトスだとしてみよう。彼らの望みとは、何だろうか。「人の心を疑うのは、最も恥ずべき悪徳だ」ということを王に悟らせることか。メロスは自分が処刑されるために刑場に表れることによって、セリヌンティウスは自分が信じていたものが、メロスの到着によって証明されることによって、「信実」というものが、決して空虚な妄想ではないことを王に教えることだったろうか。4回目の「信実」の内容を深く吟味しないのなら、そうとも読める。少なくとも、ここは問題としてとりあげないか、そのように読んでしまうことが、今までの教材研究での読みだったといえる。だが、そう読んだとたんに「走れメロス」は説教臭い物語になり、人に信実を教えるお手軽ないわゆる「道徳教材」になってしまうのだ。「こんな奴はいない」とか、「偉そうでいい気になっていやな奴だ」と言う生徒の反応は、このような読みに対応して出てきたのである。この読みは、まるで読者に対して「君もディオニスだろう？信実ってやつは存在するんだ。人を信じることのできるいい人になりなさい。」と肩を叩いてくるかのようだ。欺瞞に人一倍敏感な中学生が、信実を勧めるこの「したり顔のスタンス」に拒絶反応を示すのは、むしろ当然であり、健全であるというべきだ。

しかし、先のようにメロスとセリヌンティウスの心情を読んだならば、「おまえらの望み」と

は、そう簡単には決まらない。そもそも、作品の中で二人が揃って王に望むシーンなどない。彼らが共に望んだものとは何だろうか。

日が沈みかけ、もう間に合わないと言われ、それでも走るメロスは、何を望んだか。はりつけ台にかけられ、徐々につり上げられながら、消えようとする最後の残光をみつめていたとき、セリヌンティウスは何を望んだか。全編を通じてメロスの心情をくだまくように饒舌に述べてきた<話者>は、最後の場面ではもうメロスの心情を語らない。ただ、「メロスの頭はからっぽだ。何一つ考えていない。ただ、わけのわからぬ大きな力に引きずられて走った。」と述べるだけだ。セリヌンティウスの心情もまた、話者によって語られることはない。

おそらくこのとき、ふたりは何も「望んで」はいない。メロスは最後の瞬間まで「走る」のみであり、セリヌンティウスは処刑される瞬間まで「待つ」のみである。王が「おまえらの望みはかなったぞ。」というとき、少なくともそれは、メロスとセリヌンティウスが情動的に望んだものではないのである。

では、そうでありながら王が「おまえらの望みはかなったぞ。」といったのは、どういうことだろうか。「おまえら」が意識的に望むことなく望んでいたもの、王が彼らの望みとして認識し、かつ「かなった」と祝福したもの、それは何だろうか。この作品のもう一つのポイントがここにある。

松崎氏は、王の改心についてはそれほど触れてはいない。

この友に対する裏切りによって、「わたしを殴れ。力いっぱいほおを殴れ。……」という感動的な場面が生み出されることになる。そして、「信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。」という王の言葉が引き出されることになる。(43頁)

と述べるにとどまる。しかし、松崎氏が強調しているのは、メロスに裏切りの心がなかったなら、刑場での殴り合うという感動的なシーンはなくなり、王のこの台詞も「引き出され」なかった、ということである。つまり、王の改心、彼らの望みを考える際、「裏切り」の経験は不可欠であると判断している。

松崎氏のこの読みをもっと突き詰め、「走れメロス」における焦点を、「自分との闘いである」と明確に語っているのが西郷竹彦である。西郷氏は「走れメロス」について、『文芸研教材研究ハンドブック中学校3 走れメロス』(西郷竹彦監修 山中幸三郎著 1993 明治図書)の巻末の座談会において、次のように語っている。

一番はじめの方で、王自身が、人を信じることができないという言葉があり、その後で、人の心はあてにならない、人はこれだから信じられないとくり返し言っています。これは他者をさして言っているのです。自分の言葉が信じられないのではない。他人の心が信じられないと。だけど問題は、他人を信じられないというのではなくて、自分自身が信じられなくなってきているのです。それと、メロスがこう言いますね。<先刻のあの悪魔のささやき><あれは悪い夢だ>と。この<悪魔のささやき>というのは、自分の心のささやきなのです。自分を正当化しようとしたささやきなのです。他人の心が信じられなくなるのではなくて、自分の心が信じられないのです。人間は、そういうところがある。「走れメロス」というのは、そのこととの闘いなのです。(82頁)

僕が今していることは太宰の意図であるかどうかは別です。しかしながら、おそらく太宰は、王の言った言葉を先の私のいった意図でかいているのではないかと思う。なぜかという、一番、最後のところで、二人の友が相まみえたときに、こう言います。〈セリヌンティウス〉がくたった一度だけ、ちらと君を疑った。〉人を疑ったという。つまり、本当の親友といえども、相手をくちら〉と疑う。信じられなくなる瞬間がある。〈セリヌンティウス〉の言葉の中で言わせている。もちろん〈メロス〉もくわしは途中で一度、悪い夢を見た。〉と言わせている。王と同じように、セリヌンティウスと同じように、人を信じようとしてきたけれど裏切った、というふうには書いている。でも、読者である僕はそんなことは当たり前だと思う。絶対的に人を信じるということは、多くの場合、不可能といっていいと思う。たとえ、どんな親友でも、愛し合っている間柄でも、くちら〉と信じられなくなるというのは、ありうることだ。それは、言ってみれば常識だし、ことさら言うまでもないことでしょう。それよりも、この作品が、ある意味では、作者の意図を越えてというか、読者である僕が、いちばん、劇的感動をもつのは、さっき言ったように〈メロス〉が人を疑うよりも、自分の心が頼りにならない、弱い、それとの闘いこそが、いかに困難かということを実に体験する。そこが、一番、強く読者が共感するし、魅かれるところではないか。人はあてにならない、そんなことは言うまでもないことです。そうでしょう。人は信じられないときもあるけれど、それでもなお信じたいというものではないという時に、もっとも困難なことは、自分との闘いであるという、こっちの問題なのです。(83～84頁)

生徒もいっているけど、始めの方の〈メロス〉は何か共感できない。自己との、あの闘いの場面ではじめて、そこに人間性を見て、共感できたと言っている。そこが大事なところなのです。(85頁)

それは、人間の真実がそこにあるからです。そういう時に二通りある、言い訳をして、早々とあきらめるか、開き直ってすましてしまうか。一方、やぶれかぶれでも、取り乱してでも、なお、執拗に闘いつづける人間との二通りがあるわけだ。〈メロス〉の人間的な「弱さ」こそが、実は〈メロス〉の「強さ」なのです。(85頁)

メロス人間的な弱さの中に強さを感じ、メロスが走っていく過程、特に後半から最後にかけての「やぶれかぶれ」の「取り乱した」なりに主体性を読みとる、という西郷氏の読みは、いつものように鮮やかである。松崎氏が、裏切りの心があったから、最後が感動的になり、王の言葉を引き出した、とするのに対して、西郷氏はそうした自分の弱さと闘うところに人間の真実があり、「走れメロス」の文芸的「美」があると主張している。この逆説的な「やぶれかぶれさ」に強さを見いだす読みは、王の台詞を考える際の重要なヒントを与えてくれる。

(5) 信実の認識者

疲労したときの自分自身の言い訳の誘惑、そしてフィロストラトスの、セリヌンティウスの愛

弟子からのゆるしの誘惑(「もうむだでございます。走るの、やめてください。もう、あの方をお助けになることはできません。」「やめてください。走るのやめてください。今は御自分のお命が大切です。）」—これはあきらめようとする自分の心に内在化して、強力な言い訳になる。—に屈せず、やぶれかぶれのまま走り続けるとき、メロスはほとんど冷静な判断力を失っている。ことに、特に最後の部分は、メロスの得意な自己劇化すらも忘れて、ただ走るのである。その姿はフィロストラトスをして「ああ、あなたは気が狂ったか」と言わせている。

あれほど正義だ、愛だ、信じる心だと言っていたメロスが、「間に合う、間に合わないは問題ではない。」といい、「人の命も問題ではない」という。メロスはもともと約束を守って、自分のかわりに人質となったセリヌンティウスを救うために走っているはずだった。この点から言えば、メロスがかつて言ったように、「途中で倒れるのは、初めから何もしないのと同じことだ」。救えないなら、走る意味などないはずなのである。フィロストラトスがセリヌンティウスを救うことはもうできないといっているのに、「人の命も問題ではない」と言い、「ついてこい!フィロストラトス」とまで言うメロスは、ふつうに考えれば明らかに錯乱している。メロスにとって確かなのは、「まだ、日は沈まぬ。」ということ、「信じられているから走るのだ。」ということの二つだけだ。それがどんな意味があるのか、間に合ったらどうなるのか、間に合わなかったらどうするのか、そんなことはメロスは今やまったく問題にしていない。メロスには、もう自分のしていることがわかっていない。西郷氏が「やぶれかぶれ」というのはこのことを指している。

待っているセリヌンティウスの方はどうだったろうか。フィロストラトスによれば、「刑場に引き出されても、平気でいました。王様がさんざんあの方をからかっても、メロスは来ます、とだけ答え、強い信念を持ちつづけている様子」だったという。後のセリヌンティウスの告白によると、「三日の間、たった一度だけ、ちらと君を疑った。生まれて、初めて君を疑った。」とある。むしろ松崎氏のいうように、このセリヌンティウスの精神の強さに我々は驚嘆すべきなのかもしれない。三日のうちのたった一回とは、いつのことを指すのかわからないが、それが生まれて初めての疑惑というのなら、驚くべきことであり、滑稽でさえあるかもしれない。太宰がセリヌンティウスの人格をほとんど無傷でラストまで持っていくことができたのは、この場合、セリヌンティウスにできることは「待つ」ことだけであり、何も行動することができなかったからである。

しかし、いよいよ縛られ、はりつけ台に徐々に上げられながら、夕陽の最後の残光を見つめていたとき、セリヌンティウスがまだのんきに待つ気でいたとは考えにくい。そこでは、「処刑されて死ぬまでは待つ」という「強い信念」が必要だったはずである。もともとセリヌンティウスには何の罪もない。命乞いをしてもいい。だが、もしも王が言ったであろうごとく、メロスがわざと遅れてくるのだとするなら、また、メロス自身は必死だったが、どうしても間に合わないとするなら、セリヌンティウスの「待つ」行為は、処刑され、絶命した時点で意味を持たなくなる。いよいよ処刑の瞬間を迎えんとして、なお「待つ」には、待つことの無意味さの前でなお、「待つ」という行為をし続けることが必要である。この「待つ」行為は、まるで神を待つかのような精神が必要である。間に合うとか、救ってくれるとかいう保証のないままに、絶対的に信じつづける精神がいる。この待ち方もすでにある意味ではファナティック(狂信的)である。

メロスにしてもセリヌンティウスにしても、最後の方はもうただ「走り」ただ「待つ」人間として登場しているのである。彼らはその瞬間、何も「望んで」はいない。極限状態の中で、やぶれかぶれになっているだけだ。

群衆と王が刑場で見たものは、ただ「待つ」存在として今にも処刑されそうになっているセリヌンティウスと、ただ「走る」存在として刑場に駆け込んできたメロスの姿であった。

セリヌンティウスの縄がほどかれたとき、二人はまだ興奮状態にはあったが、極限の緊張・錯乱からは解放されていた。そこで、友と再会の喜びを分かち合おうとしたとき、メロスにとってはセリヌンティウスが、セリヌンティウスにとってはメロスが、すぐには抱き合えないほど崇高なものに感じられた。ふたりはおのれの卑小さを知り、互いに友の向こうに「恐ろしく大きいもの」「わけのわからぬ大きな力」の存在を感じていた。

王の見たメロスとセリヌンティウスの姿が、このようなものであったとしたなら、王こそ、メロスとセリヌンティウスが到達した「大きな力に引きずられるように生きる」生き方に、または人をそこまで引きずる「大きな力」に対して、「信実」という言葉を与えた最初の人間なのだ。

「おまえらの望みはかなったぞ。」という王の感じた「おまえらの望み」とは、わけのわからぬもの、それを信実と呼ぶならば信実が、たとえ手の内になくても、その実在を実感できなくとも、信実を求めながら生きていたい、というメロス自身も考えたこともない願いだった。王は、その願いは願うことではなく、そうして生きることによってはじめて願われるのだと悟ったのである。

王は、またはじめてそうしたメロスとセリヌンティウスのありようを「望み」として認識し、意味付けたのである。そして、「望みがかなった」とは、二人が、再会したその瞬間、メロスもセリヌンティウスも知らないままに、「信実」がそっと二人の上に舞い降りたのを、王は理解したのである。「信実とは、決して空虚な妄想ではなかった。」しかし、普段のメロスのように、いい気になって自分は信実の士だと思い込んでいるときには、「信実」は決して姿をあらわさない。メロスとて、セリヌンティウスとて、信実を手にすることはできない。ただ、それを「信じようとする」その中でのみ、ときとして信実が舞い降りる。それは、聖人君子である必要もない。超人的な活躍をすることでもない。なぜなら、刑場に集まった民衆たちにも、それは感じることでできたからだ。王のいう「おまえらの仲間」とは、信じようとする心を凍りつかせない生き方をさしている。望みは望みとして自覚できないときに真に望みである。信実は、そうと知らずただ「生きる」ときにのみ、人々の上に舞い降りる。王こそが、この小説のただ一人の認識者だったのである。

(6)「走れメロス」の教材としての問題点

見てきたように、この小説における「信実」の表れ方はほとんど宗教的な「邂逅」に近いものであり、その認識と演出には、ある種の宗教体験に似た高まりを必要とした。「走れメロス」が異様に高揚した語り口で終始語られ、感動する読者には強烈な感動をもたらすが、その「ノリ」に入っていない読者にはまったく拒絶されてしまうのは、このためである。

「走れメロス」の教材としての難しさはここにある。松崎氏は、指導目標の中で、「ドラマとして眺めていた読みから、メロスと共に苦しみ、涙を流し、成長していく文学の読みへと高める。」と述べていた。たしかに、「走れメロス」はこのように作品の中に深く入り込まなければ読めない作品である。寓話として外から眺め、太宰の寓意を絵解きしようとするような姿勢では、この作品の文体の持つデモーニッシュな魅力はとうていつかめない。

と、同時に、言わずもがなだが、こうした作品の中深く入っていくのはある意味で危険でもある。太宰の作品には、他のいくつかの優れた芸術作品がそうであるように、人を引きつけてしま

う毒がある。たとえばこうした毒に対して敏感な教師たちは、子どもたちをこうした作品に溺れさせてはいけないと考えて、授業も言語技術の側面に絞って行おうとしたりもする。だが、人生のうえで、こうした毒にやられる機会というのは、いつかやって来るのである。毒をすべて排し、純粹に利用活用できるもの、十分消化できるものばかりを与えることで、毒に対する耐性を育てないまま成長させてはならないだろう。

「走れメロス」は、一見道徳的な寓話に見える。しかし、実は誰でもこの作品に潜む毒には本当は気づいている。だから、生徒たちは惚れこんだり、極端に嫌ったりするのである。しかし、述べてきたような、極限においてやぶれかぶれに何かに向かっていくような時は、人生ではおそらく避けられない。そしてその向こうに「信実」が見えるときもあるのである。我々は、毒ごと飲み込んでも、その中で再び自分を見つけ、さらにたくましく成長していく強い心を、育てなければならない。

群衆が「万歳、王様万歳！」と叫んだあと、作品の最後で、一人の少女がメロスに緋のマントを捧げる。セリヌンティウスがからかって、メロスはひどく赤面する。裸であることに気づき、赤面する。友人を冗談で軽くからかう。これは、日常的な世界である。「メロスは激怒した。」で初め、猛烈に読者をおおってきた太宰は、作品の世界から、読者を日常の世界にふんわりと軟着陸させようとしている。

壮絶に盛り上がったドラマを日常の場面に戻して物語を終える、という手法は、一般によく見られるものである。わかりやすい例で言えば、刑事物のテレビドラマ、捕物調の時代劇などが、そのパターンである。また、冒険ロマンも多くはそのパターンをとる。これは日常的な、読者や視聴者などの受け手と同じ世界から、主人公が非日常的な冒険の世界へと入り込み（多くは命の危険にさらされる）、そこから日常の世界へと帰還する、という構成を持たせ、ロマンの受け手を安心させ、受け手を物語の世界から日常の世界へと、違和感なく戻そうとする、エンターテイメントに共通の特徴である。この終わり方の特徴は、言うまでもなく、受け手が「問われない」こと、受け手の受けた揺さぶりを緩和することにある。

「走れメロス」がある生徒には熱烈に好まれ、ある生徒には徹底して嫌われるということの背景には、このエンターテイメント的構成が、作品の奥深くにある「信実」に関する太宰の切実な思いを覆い隠し、娯楽として消化できるような「徳目」としての信実や友情に見せてしまうことが大きく作用している。

外枠として冒険ロマンの形をとるこの小説を近代のリアリズム小説と同じように読むのは、やはり無理がある。しかしまた、寓話として読むことは、概念としての徳目を発見するにとどまり、しかもこの小説における徳目は授業するまでもなく、よく見えるように作られている。

おそらくこの小説を読み味わうためには、第一に、この小説のエンターテイメントの仕掛けに乗って、冒険ロマンとして楽しむことが重要だ。メロスとともに走る、とか、メロスとともに成長する、といったことばが、文学ならではの読み方、効能として言われることも多いが、「走れメロス」のエンターテイメント性が、楽しみとしての「同化」は保証しつつも、メロスとともに苦しみ、成長していく、というような「文学教育」的構えをあるところから先は拒絶している。必要以上にメロスに思い入れ、同化させようとする教師に対して、生徒たちは嘘臭さを感じているのだ。エンターテイメントをエンターテイメントとして楽しむ。このことすら忘れた文学の授業は、もはや硬直した徳目の教え込みとなってしまうだろう。

「走れメロス」を冒険ロマンのエンターテイメントとして十分楽しんだ上で、少し距離を置き

て太宰の描いた信実とは何であったのかを考えさせたい。その時に、「走れメロス」の文体の問題や、王の改心の不自然さなどの問題が、改めて浮上してくるであろう。

論叢2号の拙論にも書いたが、教材研究および教師研究批評は、その成果よりも、読み続け、読みをあらたに生き返らせ続けることに意義がある。走れメロスの中の信実の問題が、今回、松崎氏の教材研究を批評するなかで述べてきたように浮上してきたが、これが規範であるとか、新たな正しい読みであるとかいうつもりはない。むしろ本当の問題はこの私の読みが生徒の読みをどう照らすかであり、教室での生徒の読みはどう応えられるか、ということである。むしろこの問題は、教室においてこどもに自分を開いていこうとする行為によってしか、検証はできないのである。